批評・紹介

論語の新研究

宮崎市定著

昭和四十九年六月　東京　岩波書店　A5判　本文三九七頁

宮崎さんが『論語』に「新らしい讀み方」を試みておられることは、岩波書店の『圖書』の連載で知ったのが最初である。一九六九年というから、もう五年も前のことになる。

その時、なるほどと感じ入ったのは、學而篇冒頭の「學而時習之、不亦說乎。……」の一章の讀み方だった。學問のよろこびだとか樂しさだとかを說いたもの、といった解說類にうんざりしていた私は、宮崎さんがこの章を、學園内での實習のよろこび、學園外から人の訪れてくれるたのしさ、人に知られなくても不平を抱かぬ心境、の三段階に分けて、一貫した把握を試みておられるのを讀んで、一種のさわやかさを感じたものだった。それは、宮崎さんの書かれた他の著書論文類――中國古代史關係以外のものはまともに讀んでいるとは申しかねるが――から受ける明快さと同質の、切れ味のよい讀み方という印象だった。

『論語』は、誰でもなんとなく入れるが、出るのがむずかしい。迷宮のようなものだ。次々と註釋・訓詁の峰がそそり立ち、回避してすり抜けようとすると、崩れ落ちて來る。自己流に踏みあとをつけようとしても、地盤そのものがすべり出したりする。その中で、したたかに、且つしなやかに、自分のコースを見つけて行くことは、至難のわざに近い。

宮崎さんは、言うまでもなく、その道の達人である。『論語』にむかいあう宮崎さんの強味は、自分は歷史學者だという立場への自信にある。歷史學者だから、眼前の文獻はすべて史料として平等だ。史料として解讀できぬ文章があれば、それは史料自體の方に誤りがあるはずだ。長年、古今東西の史料に接して來られた宮崎さんには、誤りのない本などは存在しない、という確信がある。だから儒敎の經典の『論語』だとて、同じことだ。誤字は訂正してこそ本來の姿にもどる。

ところが、淸朝考證學はその點では臆病だった。嚴密な文獻學的研究をやりはしたが、彼らはあくまでも儒學者であり、漢代の學問への復歸を目標とした。そして「證なきものは信ぜず」を盲信するあまり、文獻の內側に證據を求める內部批判の方法を缺いた。それが彼らの權威依存主義とも結びついていた。

そういう考證學の習氣に對して、宮崎さんは敢て「意を以て改める」方法を實踐しようとされる。文獻に明證がなくても、ここはこうなるはずだ、という判斷に大膽に從われる。その判斷の集積がこのたびの『論語の新研究』の新著である。

言うまでもなく、こういう方法は達人にこそ許される境地であって、初學者が似たことをやれば大ケガのもとになるだろう。讀者としては、齡古稀を超えて、文字通り「己レノ欲スル所ニ從ヒテ矩ヲ

踰エズ」の境地に達せられた宮崎さんの、見事な刀さばきのひらめきに、ただただみとれる以外になさそうだ。

——と言っただけでは、書評ではなくて感想になってしまう。もう少し具體的に刀の切れ味を探ってみよう。

*

この本は三部から成る。

第一部　歴史篇は、これまでの『論語』研究史の概觀である。その中でとくに注目すべきものは、『論語』の成立を論じた第二章である。かつて武内義雄氏は、古典的名著『論語之研究』で、『論衡』正説篇の一節（二六四字）を根據にして、「齊論」一篇、「魯論」一篇、「河間本」七篇、計九篇がいわゆる「上論」の主要部分に當ることを論じられた。とくにその中で鍵になったのは、

至武帝、發取孔子壁中古文、得二十一篇、齊魯二篇、河間七（原文は九だが、武内氏は七に訂した）篇、三十篇。

の一文で、武内氏はこれを、「古論」二十一篇の他に、「齊」「魯」「河間」の計九篇をあわせた三十篇が、現今の『論語』の素材であったことを述べたものと解した。ところが宮崎さんは、田舍育ちであまり出世もしなかった王充の情報を信用しすぎるのはおかしいという判斷から、『論衡』のこの部分に次のような大膽な手術を施して、復原を試みられる。

齊魯二河間九篇三（參）十（拾）篇
←←←←←　←　←
齊論又多問王篇　治　道篇

つまり「齊論」二十二篇には、問王・治道の二篇が多いことを述べたにすぎないことになる。宮崎さんはこういう修正復原の試みを、「いささか突飛な想像ではあるが、併しそれは微視的に見た際の不自然感であって、大局的に見た場合、決して荒唐無稽な説とは言いきれぬであろうと信ずる」と、自信をもって語られる。ちなみにこの新説は、一九七二年發表の「論衡正説篇説論語章稽疑」（『東方學會創立二十五周年記念　東方學論集』所收）で、すでに詳論されている。

また、第六章　考證學の經書研究は、いわば宮崎さんの、考證學に對する戰闘宣言である。考證學は、その長所自身の中に限界があり、その「限界をよく見極めて、うっかりその立場に引きずりこまれてしまわない用心が大切である」。考證學が宋より唐、唐より漢と、古い時代の注ほど尊重するのは「信仰」であり、鄭玄の注の殘簡だからといって、必ずしも學問的に價値があるとは限らない。何晏の『集解』以後、鄭注が散佚したのも、それだけの理由があった。最近トルファンで出土した『鄭玄注論語殘卷』を見ても、鄭注とあれば驚喜してありがたがってきた考證學の限界が、かえってよくわかる——と、きわめて辛辣である。

第二部　考證篇は、『論語』本文についての疑問と、訓詁についての疑問との二章に分れる。

本文についての疑問（第一章）は、誤字、脫字、衍字、錯出の四節に分れるが、その中とくに宮崎さんの面目躍如たるのは、現本『論語』テキストに誤字ありとする七カ條である。

(一)　肉雖多、不使勝食氣。（鄉黨篇）

「食氣」の二字は「餼」一字の書き誤りで、「餼」すなわち穀食と解すれば「意味がすらすら通る」。この程度のことは、考證學者なら氣づいていたはずだが、考證學者の自尊心がかえってこの「思

いつき」を口に出すのを阻止した。自分は浅學者だから、解釋不可能なところには原文に誤謬がある、とはばかりなく言える、と宮崎さんは言われる。この快調子は以下の各條についても續く。

㈡ 子曰、回也、其心三月不違仁。其餘則日月至焉而已矣。（雍也篇）

「其心」は「惑」字の誤りで、敎える意味だろう。三ヵ月敎えると、最高の仁に違わなくなった。その他の德目は一日あるいは一月で到達してしまった、とこの章を讀むと、顏回の明敏ぶりが躍如となる。

㈢ 子曰、苟正其身矣、於從政乎何有。不能正其身、如正人何。（子路篇）

末句の「正人」は「政」一字の誤り。そうすると「於從政乎何有」とうまく對應する。

㈣ 子曰、君子謀道、不謀食。耕也、餒在其中矣。學也、祿在其中矣。君子憂道、不憂貧。（衞靈公篇）

中段の對句の後者、「學ぶや、祿其の中に在り」は、極めて自然で、勉強すれば別に運動しないでも、地位俸給が向うの方から轉げこんでくる、といういわば常態である。ところが前者を「耕すや、餒其の中に在り」とよむと、勤勉に耕作しても飢餓に襲われるかもしれぬ、という非常事態になって、二つの對句の因果關係が逆轉してしまう。そこで考えられるのは、「餒」が誤字ではないかということだ。事實、或る系統のテキストには「餒」に作るものがあり、これをダイとよむ時には「餒」と同じ飢餓の意味になるが、イとよむ時は飯の意味になる。そうすると、「耕せば、餒其の中に在り。學べば、祿其の中に在り」の二つが對句として完成される。

㈤ 孔子曰、生而知之者、上也。學而知之者、次也。困而學之、又其次也。困而不學、民斯爲下矣。（季氏篇）

この「民」を「於」に改めると、「上」「次」「又其次」の順に、これが最低の「下」だとなって、文勢も意味も疏通する。

㈥ 子曰、不患無位、患所以立。不患莫己知、求爲可知也。（里仁篇）

この章はどうも意味がはっきりしない。他の內容類似の章と對比してみると、「患所以立」は「患無以立」に、「求爲可知也」は「患無可知也」に訂した方が筋が通る。

㈦ 寬則得衆、信則民任焉、敏則有功、公則說。（堯曰篇）

德目としての「公」は『論語』ではこの他には使われていない。公平の意味なら「均」が用いられる。ここの「公」は「惠」字の上半部が磨滅し、下の「心」の部分も薄れていたのを、「公」とよみあやまったのではないか。

訓詁についての疑問（第二章）は、從來の讀み方、解釋のしかたに對する宮崎さんの率直な疑問の表明である。句讀、引用文、文意、語義の四節に分れる。そのすべてを紹介する餘裕はないが、たとえば句の切り方については、「仲弓、子桑伯子を問う。子曰く、可なり。簡なればなり」（雍也篇）と從來よんでいたのを、宮崎さんは「可や簡なり」と續けてよみ、「可」が子桑伯子の名であった可能性を追求される。漢代の博識者が集まっても子桑伯子の名が可だった證據がなかった、それ故に彼らはこの句を「可也。簡」とよんだ。ましてや現今の人がそれを超える證據を出せるはずがないから、我我としては合理的な推測によってある程度まで肉迫したことで滿足しなければならぬ、と言われる。こういう態度には、宮崎さん獨特の知的好奇心の強さと、と同時に、それに溺れきらぬ聰明さが示さ

れている。

第二章でとくに苦心が拂われているのは、引用文の問題(第二節)だろう。『論語』には古書や詩句からの引用と思われる句が、必ずしも引用の形式をとらずに含まれているのではないか、という前提から、歌曲的なリズムと修辭的な技巧をもつ四字句は、引用句として扱った方がよい、と推論される。その中で最も警拔なのは、

子夏曰、賢賢易色、事父母能竭其力、事君能致其身、與朋友交、言而有信、雖曰未學、吾必謂之學矣。(學而篇)

の解釋である。この最初の四字句は、從來、「賢ヲ賢トシテ色ニ易ヘ」とか「色ノ易クセヨ」とか、さまざまに解釋されているが、これは引用句として讀めないか。そこで宮崎さんにひらめくものがある。易色とは蜥蜴の色のことではないか。トカゲは環境によっていろいろに色が變る。人間も同じで、父母に事えれば孝行、君に事えれば忠義、朋友と交わるには信義、と變る。そういうことを學ぶのがすなわち學問である、と子夏は言ったのではないか。この新說は、「賢賢」の語義が追究されていない點で不滿も殘るが、いかにも覩覺的映像の明確な宮崎さんらしい發想である。

文意の問題(第三節)は、文字の誤りでもないし、句讀の切り方もそれ以外に考えられないが、從來の解釋では意味がとりにくい場合には、一度註釋から離れて本文を自分の學力で讀んでみよ、という勸めである。それで意味が通るなら、傳統的解釋の方に不自然さがあることがわかるだろう、と言われる。たとえば、季氏が泰山で旅祭を行なったのを冉有は止めさせられなかった。それを孔子が責めて、

嗚呼、曾謂泰山不如林放乎。(八佾篇)

と言ったのを、從來、「曾ハチ泰山ハ林放ニ如カズト謂ヘルカ」とよんでいるが、どうもよくわからぬ。むしろこれは、「曾テ泰山ヲ謂フコト、林放ノ如クナラザリシカ」とよんではどうか。つまり、昔はお前も林放らと同じく、季氏が泰山を祭ることの非禮を論じていたではないか、と、今は墮落した冉有を叱ったことばとしてよんではどうか。こういうよみ方は、十哲の一人の冉有を、林放という無名の人物より下におくことになるので、漢代以後の訓詁學者にはタブーだった。だから、無理無體なよみ方を發明したのだと言われる。

語義の問題(第四節)では、單語の語義が扱われる。「君子」には四通りの意味があり、その中には第二人稱—貴君とか諸君といった—として使われる場合のあること、をはじめ、

齊景公問政於孔子。孔子對曰、君君臣臣、父父子子。……(顏淵篇)

は「君君タリ、臣臣タリ……」ではなく、「君ヲ君トシ、臣ヲ臣トシ……」というように、上字を動詞に、下字を名詞によむべきことなど、創唱に富んでいるが、詳說は避ける。それらはいずれも、經書から教訓をひねり出そうとする訓詁學者には採用されない解釋だが、『論語』はこのくらい滑脫によんでもいい書物なのだ、というのが、宮崎さんの基本的な姿勢である。

以上が第二部で、以下の第三部　譯解篇は、二三〇ページにわたる宮崎さん苦心の作である。この譯解篇を完成する過程で、第二部にまとめられた諸疑問が浮び出て來たと思われる。宮崎さんの所謂「新譯」は、譯文平明、學を衒わず說教調に陷ることなく、ハギレのよい現代語譯と言えそうである。その中には、第二部には觸れら

れていない新説が隨處にある。たとえば、「吾十有五而志于學、……」（爲政篇）の一章は、孔子が體力・氣力の衰えを自覺した歎聲であるとか、「回也其庶乎屢空」（先進篇）は、「屢々空シキニ庶シ」とよむべきだとか、「吾猶及史之闕文也。……」（衞靈公篇）の「闕文」に、「記小善」の三字を補入してみるとか。往くとして可ならざるなき氣概にみちた解釋のしかたである。

＊

こういう宮崎さんの新説に對して、讀者はナルホドと膝を打つものがあると同時に、少々ムリではないかと思わせられるものもある。しかし宮崎さんは、そういう疑問に先まわりして、從來の定説なるものに釘をさしておられる。そこで讀者としては、自分の中に起った疑問が、あるいは訓詁學に毒された影響ではあるまいかと自己點檢を迫られる次第となる。

そのことは十分わきまえたつもりだが、なおかつ宮崎さんの新説に同じきれぬ點がいくつかある。その一つは、衞靈公篇の「耕也、餒（餧）在其中矣。學也、祿在其中矣」の一章である。「耕也……」の方は耕しても飢えることがある、「學也……」の方は學べは必ず祿がある、というように解すると、對句として不整合だというのはわかる。ただし宮崎さんは、「學也……」の方を基準にして、「勉強すれば別に運動しないでも、地位俸給が向うの方から轉げこんでくる」のを常態であると解した上で、「耕也……」をそれに揃えて、だから「餒」は「餧」（＝食）に直すべきだとされたのだが、私は逆もまた成り立つと思う。つまり、耕しても飢えることがありうる、と同様に、學んでも祿にありつくことがありうる、というように。學んでも祿にありつくことがありうる、とはナンセンスと思われそうだが、學問さえすればメシが自然に食えるようになる、とは、學究として名を成せた人はいざ知らず、一般には受け容れがたいことだ。のみならず、春秋時代末期の孔子學園とそれをとりまく環境は、現在以上にきびしかったはずである。その中でなおかつ孔子は、祿仕に弟子を推薦しながら、祿そのものを目的に學ぶことを斥けている。もちろん學んだ結果、祿にありつくことは否定しない。學んでも、豫想外に祿にありつくことがある、という表現が成り立つ所以だ。八一ページに列擧された「樂亦在其中矣」、「直在其中矣」、「仁在其中矣」の諸例は、一見無緣ないし矛盾と見えることの中に「樂」「直」「仁」が流れていることを指摘したものと讀める。「耕」と「餒」、「學」と「祿」の關係も、そのようなものとして言われているのではないか。

もう一つの例を擧げると、「君君、臣臣、……」を「君ヲ君トシ、臣ヲ臣トシ……」と讀むべしという議論も、考えすぎのように思う。おっしゃるように、語法上からは、「君君タリ」は「君爲君」となるのがふつうかもしれぬが、「君ヲ君トシ」とよむとすれば、その否定形は「不君君」とか「毋君君」とかなるはずだ。しかるに『論語』原文は「君不君」である。宮崎さんはこれを「君君とせられず」と受身によんで解決しておられるが、いかにも苦しい。もちろん、宮崎さんの論據は語法の問題よりも、原始儒家においては君臣關係は相對的・双務的なものとしてとらえられていたはずだという理解にある。それが秦・漢以後、君臣關係が一方通行的に強制されるようになって、「君君タリ、臣臣タリ……」と自然現象のようによまなければならなくなったのだ、と言われる。こういう指摘は、たとえ語法上でムリがあったとしても、『論語』のよみ方の固

定觀念をゆさぶる意味で示唆的である。しかし問題は殘る。かつて宮崎さんは津田左右吉『論語と孔子の思想』の書評（『東洋史研究』一〇―一、一九四七年）で、『論語』はその周圍を空まわりせずに『論語』自體で讀むべきだという趣旨のことを述べられたが、君臣關係を相對的・双務的とする理解は、このばあい『孟子』離婁下篇の君臣論に主としてもとづいている。『論語』に『孟子』を代入して、はたして差支えないものか。又、君臣を双務關係としてよむと、この章は父子も同じく双務關係としてよまねばならなくなるが、そういう思想が、はたして孔子や『論語』編集者に抱かれ得たものか。私自身はもとより君臣關係絕對論の信奉者ではないが、やはり宮崎さんのこの新說には少々勇み足の氣味を感じざるを得ない。

微子篇の長沮桀溺章についても、言々句々、非常な工夫をこらされたあとは拜見できるが、かえって全體としてはこなれの惡いものを感じる。「易」字を「遵」と訓ずるのに力を入れられたわりには、「與」字のよみ方が輕いように思う。より納得の行く說明を加えていただければ幸いである。

＊

本書を通讀すると、從來の訓詁・註釋の堆積に辟易していた讀者は、『論語』とはこんなにわかりやすい書物だったのか、と目を開き直す感がおこるだろう。宮崎さん自身、本書の「後語」で、「將來の研究者に再びこの無駄な精力の浪費をさせたくない、というのが私の念願である」と言っておられる。その目的は達せられたと見てよい。學而篇第一章の「人不知而不慍、不亦君子乎」を、「そういう人に私はなりたい」とさらりと譯すことは、頭の固い學者にはなかなかできるものではない。孔子と彼を圍む弟子たちとを、權威ある敎師とそれに恭々しく仕える弟子たちといった窮屈な人間關係の中におしこめていない。氣さくな日常會話の風を損しないような現代語譯が試みられている。爽涼の感がある。

しかしその反面、こんなに『論語』がわかりやすく平明になってしまってよいものか、という想いが浮んで來るのも否定できない。宮崎さんによって取り出された孔門人物像は、あたかも蒸溜水のように澄明である。だが、白川靜氏の『孔子傳』（中央公論社）の世界に暗示されたか、それともたんなる舊套への未練のためか知らぬが、『論語』には――のみならず古典といわれるものには――、もっとドロドロとした、論理や文字面では處理しきれぬ情念が渦卷いているように私には思える。「將來の研究者」が、こんな風にわかってしまって、わかったということで『論語』を通り拔けてしまってよいものか。『論語』の原文のわかりにくさのままに、それと格鬪するエネルギーを、はたして無駄だとして片附けきれるものか。『論語』をわかりやすくするために注がれた宮崎さんの努力に敬服しつつも、最後に浮び出て來る疑問はそれである。

『論語』がわかるとは、中國がわかるに等しい――というようなことを書いて、私自身、どうしてそんなことがわかるのか、と自問する。宮崎さんには、中國はわかる、當の中國人以上に中國史がわかっている、という自信がおありになるようだ。その自信なしには『論語の新研究』も生れなかったろう。かつて宋儒は「理ニ於テ切ナラズ」とか「理、豈然ランヤ」といった合理精神で、古典に新解釋を試みた。宮崎さんの新研究からそれを連想するのは、私の無學のせいかもしれない。

（小倉芳彦）